

寛永諸家譜

清和源氏西四冊之内
義家流之内義隆流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186(22)		
函號	博	76	1



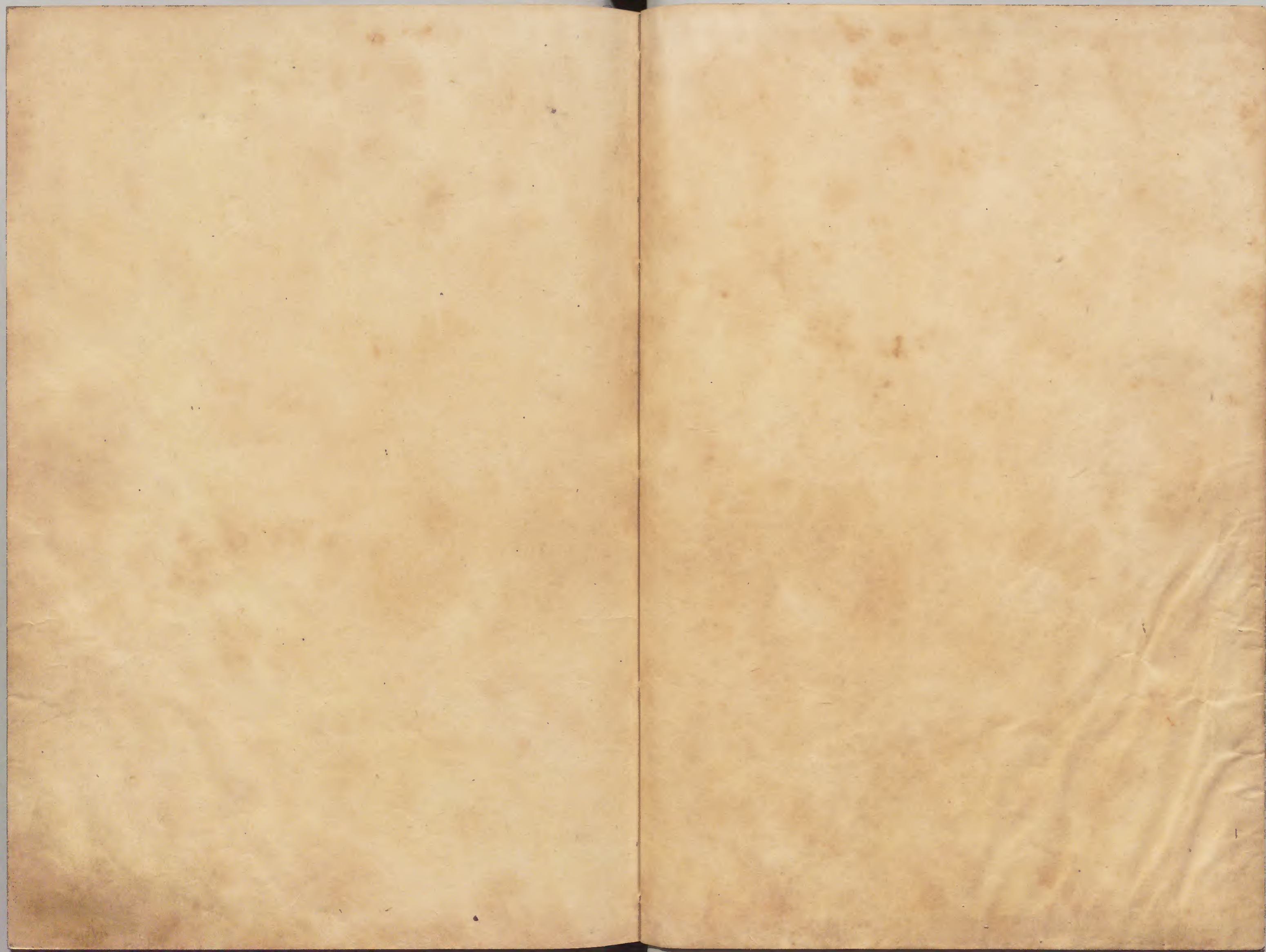
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





森

押田

寛永諸家系圖傳

清和源氏

丙四

義家流
義隆流
森

淺草文庫

八幡太郎義家の六男源義隆初く

森の六郎と号するの子頼隆と

奉^ん州^{しゅう}冠^{かん}者^がと号^する^に治^ち承^{せう}四年^{にん}九月^{げつ}

千葉^{ちのば}女^め常^{とこ}胤^のが^り取^りり^てけ^んた

頼朝よりとも小中よりちゆう之の頼隆よりたうが二男いづのこ伊豆いづ守もり頼定よりちやう
 と森次郎もりじやうと号なづせし頼定よりちやうが嫡男ちやくなん義泰よしかず
 を森左郎もりさだと号なづせし二男ふたご定氏ちやうぢと森次
 郎よりちゆうと云いふ三男さんなん頼泰よりたえと森もり之の長ながと号なづせし
 五男ごなん泰約よしかくと森もり又また郎らうと号なづせし其その子こ孫そん
 代しろあひにわぐと云いふ氏うぢと森もりと云いふ

果はたけ

越後守えちごのり 生國なまくに茂しげ濃のり 曰いは金山くみやま蓮れん臺たい居い守もり

天正てんしやう年中なちゆう曰いは金山くみやまて病死びやうじ年ねん八十はちじゆう余よ

可成よきなり

三さん太た清せいの 生國なまくに曰いは金山くみやま居い守もり
 織田おだ信長のぶながと云いふ所ところに
 弘治こうぢ元年げんねん四月しがつ信長のぶながと云いふ川がはで織田おだ茂しげ
 又また郎らうと云いふ時とき可成よきなりと云いふ人ひとんで彦五郎ひこごらう
 首くびと云いふ

曰いは二年にねん五月ごがつ信長のぶなが林はやし本もと作しやくと云いふ所ところに

可成軍功あり

永祿元年信長尾張浮那と合戦の

ころに可成ありと云ふ

曰三年信長今川義元と合戦の時可成

ありと云ふ

曰十一年信長と云ふと云ふ

の城とせしむ時信長本兼禎が岩を

屋ぶらりそのら可成柴田終理亮蜂屋

岩庫坂坂井太直と岩成主税以とせめ

て青龍寺の城と屋ぶらり主税以降参と

元亀元年五月信長に列とせしむ時

可成志賀守山山崎の両城と云ふ

曰年九月十六日約倉義京淺井敏元と

ありと云ふに三百余騎の軍勢と云ふ

穀山坂本の急よとせきと云ふに可成

守取の城中より出くふとせきたるか

十九日約倉淺井が岩坂本と屋うんと

を可成と云ふたかひに力よ討死と

冢田十八

此亦亦、このやうにあつて度この戦功ありし、いづくついで
つげくあるとよいとぬあ〜とぞ

可改

對馬守 生國同前

とどめ信をりし、のち久坂子考者、のせし
志さぶに列坂をふくめ、まがられく莫纒
の役とありし、のち年廿四歳

高麗陣のとき、いそり考者の命と受けく

可改朝鮮へ、のち陣の術と見らる

慶長五年、のち石田三成謀叛の時、可改同

東へ、のちありし

東照大権現へ、のちありし

後可改、のち五位下、のち叙、のち對馬守

伊と

日十七年、のち美作忠政、のちありし

大権現より可改と忠政、のちありし

の國たよりあつむく
六十四歳いざして病死
可政子孫未成いざのたんり見こり

女子なご

長田ながた又た勝門かつり書

女子

岡小十郎せき右勝門書

某たれが

傳たづね書

元龜元年四月廿五日信長びんぎより書
越前えちぜん約念やくねんとせしりてげ此こゝにに丹山
みく討死うちどこきりしり十九

長一ながひ

勝就かつしゆ坂さか子こ武就ぶしゆと号ごうと

濃列金山一居位

十六年一信長一此之戰場

ひふ

天正二年七月信長伊勢の毛鷲の城を

ひり時長一なるび一園小十郎左衛門曰

あつひゆ

日十年二月長一織田信忠一とていひ

武田勝頼とせしり時信濃伊奈とい

り小笠原掃部松尾の城一ありて

信忠一属せんころりハ信忠の

使とて一と一園平八あ人とつり

り掃部とて一特一伴お早名飯

田の城一ありて謀叛一城とて

出と一あきとあいけく敵の首三首

余とて一り信忠飯嶋一りり特

と一先けしてとて一幸の味と

せし

四月信長甲列より武田の一族と

から河をせしむるに織田源ら即并ちか
と一國平八と野の國は川むふ小幡とび
海軍も人質と出しく降参くだりま
信長信濃の更級高井水内埴科のに
郡とと一は給ふと一海津の城とこ
らへ居んとする付近邊の一揆を可
余人世めきつるを一二千人とてたひ
ふく敵のくび二千余と討とり信忠
獻む信忠感状とたす

六月なつむき一信濃ありて信長あけち明節あけつちた
めふらむとてまきりく上洛せん
とてまふらむとて春日園防つすがさののりするも子
と人あらふとてと一取あり先
よりて春日等と一申するはと
洛河ありおひく人質と一とるを
しとてしとては國人と一とて
あるふべし又洛次らくじの世に志ありく
さくきるもあらむと一と一まきりく

いひく信長不慮ありふらしてなん
ぢう我とあかどちゆへくわくひん
人ぢらとつとをるゝとなんぢ
我とつゝ我とつゝなんぢと付く
信長とつゝひたまくまひふぢ
日が前途迫日なりなんぢう我を
たふぢとつゝつゝ法人の人ぢら
とつゝてお國中の一撥修次のつ
まひくつゝあせとつゝんととと一

種とつゝくらなづらつゝ頭つその
つゝあつゝぶよのま馬とつゝせら
らとつゝ大河とつゝてつゝ一撥接の
馬場つゝ引退くつゝの悦つゝと一
つゝ春日園防守つゝあをけつゝあつゝ
ちの人のぢらとつゝねぢよつゝく木
の人のぢらとつゝりよ

日十二年四月九日尾列長久寺合戦の
あきを一池田勝入とつゝ下つゝ討死時

母七采

此外平生度この軍功ちとどおし

あつて

女子

若狭守将勝俊書

菓

蘭丸

幼少より信長の遊習ありてつね小

りの藝とととるれど玄徳川に

應じてよき生れつこの人なり

天正七年四月廿日信長将列しあり

堀川伯耆守國のまつりごとく民

と治りよきこしなれど蘭丸と使

者として銀子千両堀川に給

京都和泉の場名とゆゑふりの安土

へ夜に河川ありありて信長へ湯と

信長しんちやうは飲食いんじきもてう終しゆうつ時とき
蘭丸らんまるなるなりししと

日十年信長大軍たいぐんと川がわわく甲州かうしゆうの
武田たけだとわろは陣まゐりのやき美濃みの國くに
岩村いわむらの城しろと蘭丸らんまると終しゆうつり五百石
と領りやう知ちと

同年六月信長しんちやう京都きんぎよに本結ほんむすちし奉病ほうびやう
のとき蘭丸らんまる等らう洞どう惟ただを時智ときち日向守ひなたまもり
光秀みつひでと用もち心こころをきとうかひ告つと

て俄いひに本結ほんむすちとせし蘭丸らんまる兄弟まがらだいふ
せきたるさく討死うちころし信長しんちやうはけい
うられ終しゆうつ

蘭丸らんまる年としより多おほしきも悪量あくりやう河がわりふし
て信長の命いのちとけおとをとりおこさ
諸大名しよだいめい諸将しよしやうお仕降おしげ礼河れいがを毎夜まいや蘭
丸らんまる養者やしやう被流ひりやうと死しする時年十八

某

坊丸 南九と曰ふに討死年十七

某

力丸 南九と曰ふに討死年十六

忠政

右近大史後より多岐とて生國義濃
豊後秀吉の討死後一任に羽柴

氏とたまたまを後又よりの森氏とて
考者覺してのち

東照大権現伏見向給り此座の時諸人
皆天下とてやうなすくありしに
いへく諸大名者むい嶋の此座下へ
まより所あり

大権現此對面ありて人乃るるにひたき
やにとおほしき皆退かせり
志しきも忠政を人さす中いへく退か

せど廣間廊下のるり一何作と

大権現あらり一りくも二の心所

感阿そ忠政とりく御褒美阿さる

らず其家人もりかふれ御秘ん

の心もど阿り去後信濃の川中橋

と忠政一り終り

去又去五年石田治平が捕三威謀叛の

時忠政と引い進んとて使志とれり

まひくとくも許容せむ

台徳院殿へ去るびひとてまつり信濃へ

教向一書回とせむ

日八年

大権現一り每此國と忠政一り終り

日十九年冬大坂陣の時信と取く

忠政天満口とせむ翌三年大坂再乱

の心も忠政又とせむとてわたりて仙波

口一陣とり敵の首二百五門とせむ

寛永三年

台徳院殿以上海の時忠政依年たを勝
中將より任じ

日十一年

將軍政以入洛の時忠政先立ちて東山
約たしくしむる俄に病死す年六十五
あはれより先よ

大権現を深國後の以脇指と忠政
孫よりし青木肩衝の以茶入と
為領し又銀けりりの鉄炮二挺と孫よ

台徳院殿より北洞軍保と為領と之後

新坂五の以脇指と

台徳院殿豊洲の時以遺物わけて銀子

五百両為領と

此外以物とよりり母玉の時以鷹爪
弓并に金銀器服の類毎度以載と

重政

大膳亮 廿六歳

女子

関氏初少捕書内記母なり

女子

池田梅中少書

女子

松平左衛門督書
その後高直在東京亮書

女子

女子

森田通書
女子忠政いしくこなり

集

虎和丸
江戸少く九歳にて病死

忠廣 ちひろ

右左衛門 いさのみたま 後五位下おのりに叙ししる後深江しんが

寛永二年あきほ四月あきほに叙し

日十年に戸ふく病死年二十

あきより先し

白徳院殿よりかみきりの書免の御物まがら

と津領ついでと

女子

女多能わし書めいふのとのきり

長継 ながつぐ

内記 ないき 生國なまくに義他ぎた

実まことの園その民たみ於お少すく博はく成なり次つぎ子こより義他ぎた也なり

二とと御ごあひくみす

寛永十一年忠政ちゅうせい遠とほくしし但たせせ京きやう都と

將軍しんぐん 茂しげ と 礼らい あり たくましく けつり けつり けつり

家督けとく と けつり 茂他しげた の 國くに と 領りやう せ

日十二年にじふにねん 日ひ おり 叙ぎよ せ

日十七年にじふしちねん 十二月じふにがつ 結むす 後ご へ 叙ぎよ せ

このしんまいぶ
茂しげ 叙ぎよ せ 叙ぎよ せ

● 集

岡十郎右衛門尉

生國尾張一文

信長小姓

法名淨蓮

岡氏（尾張原の姓）よりあつり大織冠八代

儀有（長秀）十一代（信平）と岡次郎と

長（信長）と信平（信直）と岡五郎（信直）と長（信直）

と信直（信直）と岡左衛門尉（信直）と長（信直）と子

孫代（信直）におれいぐ岡氏とす

某

岡小十郎大湯の射

生國の射

信長の軍の陣の下
て軍功あり

迫江の合戦の時信長と渡井とたむ

ううううと立ちあひむの渡井が

岩の下の小十郎大湯の橋と

まひり事の本所の法の率と下知

鉄炮のとのまじのとのまのまの

よやくの一人の目とおどろのうのす

天正十年信長の軍の陣の下の甲斐國

うのあのむのじのくのうのらの森の茂の苑の守の

属と

小十郎大湯のと尾張須賀の城と渡井の

八と中の守の夜の境目と編のりて

あのひのたのむの勝の事とゆのり

日十二年四月九日の久の合の戦のとき

小十郎左衛門光盛あきらに
初はつ武藏守討死ついでと
かかししずずいいふふたたくくふふてて終つにに討死ついでと
年三十三

成次なりつぐ

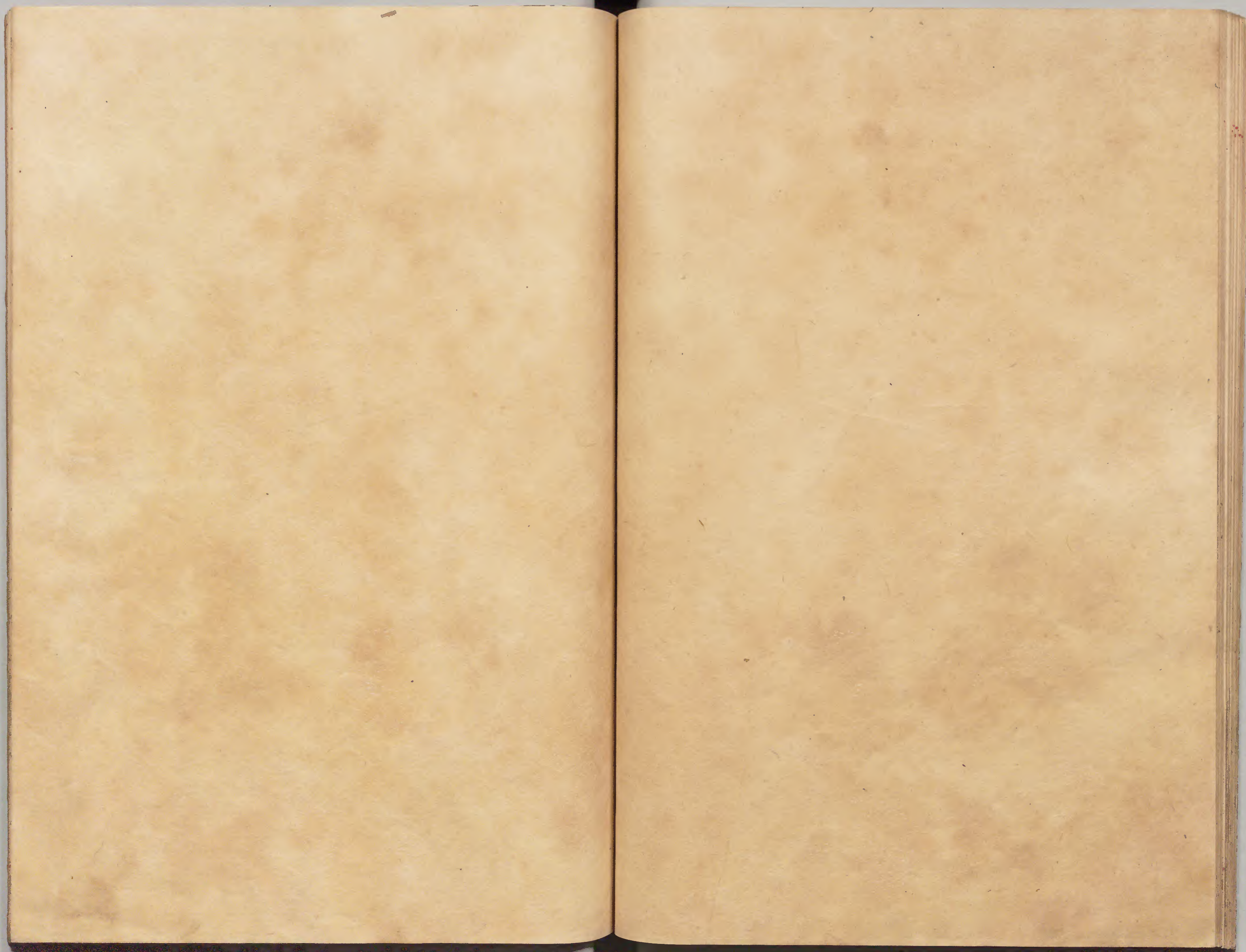
岡民部少輔

長継ながつぐ

森内もりうち氏うぢ正ただ氏うぢ

長政ながまさ

関式せきしき少輔せうぶ



森もり

可政かせい

對馬守たいまのりょう

生國濃列金山なまくにのりょうきんざん

事ことハ森内もりうち北きた七しち繼ついで橋はし中ちゆうニ洋やうたり

重政しゅうせい

河内守わののりょう

河内守わののりょう

後のちニ對たいすることと改かへ

生國日前

伏見うし一つおののくく神かみ

東照大権現とうしやうだいこんげんははけけくくそそままのの時とき十じゅう年ねん

十じゅう年ねん

台たい徳とく院いん殿でんととあありりたたくくままののりり

同どう十四じゅうし年ねん後のち五位ごい下げ一いち叙しよをを

寛かん永えい八はち年ねん御ご使し者しやのの使しととしし

同どう七しち年ねん

將軍しやうぐん家けととしし

同どう十じゅう年ねん御ご使し者しやははおおののくく病びやう死し年ねん五ご十じゅう三さん

法ほふ名な宗そう瑞ずい

可か澄じやう

大だい権こん現げん 生せい國こく日にち前ぜん

十じゅう一いち年ねん御ご使し者しやははおおののくく

大だい権こん現げんははけけくくそそままのの時とき

寛かん永えい五ご年ねん石いし田でん治ち部ぶのの補ほ之の威い謀ぼう反はんのの

少子ちうし父可政ちかまさと相あひももりり國東くにとう
おもしろき

大権現おほごんげん小湯こゆたぐたぐすす川がわ不ふ

同八年三月二十五日ごごのひ没な位ゐ下げ叙ぎよと

寛永十五年かんえいじゅうご江戸えどふふおおわわくく病死びやうじ年ねん

又十四

可久かひさ

たき清たきひら 生國なまくに駿列しゆんれつ府中ふちゆう

寛永四年十二かんえいしよんじふに業わざああててははぐぐとと

台徳院たいとくゐん殿でん一いちににくくそそのの山やま家け

同九年

將軍家しやうぐんけととあありりたたぐぐすす川がわ不ふ

重継ちゆうけい

次郎じちろう左衛門ざゑもん 生國なまくに掾げん列れつ大坂おおいさか

寛文十六年

台徳院たいとくゐん殿でんととあありりたたぐぐすす川がわ不ふ時とき小十二せうじふに業わざ

元和二年十一月廿一日

寛永十八年

將軍家へ此の如く申上り候旨に付
御座候事

とけぐ

このしんぶん
家紋舞鶴

集

迎江守

生國月前

● 集

迎江守

生國下総

押田

義隆の末流

胤定 たねさだ

をりけのつこ
下野守

しんごくさうぜん
生國月前

ちのむら
千葉女よけ之一方の役とけしし千葉

いまた
女死去の後小糸氏政よりけし

わがふしとくま
法石常蓮

吉正 よしただ

きん
友太湯門尉

生國月前

せんて
先祖より千葉氏よりけし一方の軍中 かんち

あふり
とけしむらじり八日市場をびは大洞 おほほら

あふり
あ城と守り千葉氏滅亡の後又とを

しん
小糸氏政よりけし其後

くわん
大権現園東御進教のときあかされし

より

台徳院殿

將軍家よりけし

豊勝 よしの

三次郎 生國同前

台徳院殿

將軍家一に之を申し奉

家紋鳩齋草 このしんじい

九星廿級千葉外よりさし

